

「Papers of Th. Stcherbatsky」を一読して

荷 葉 堅 正

I

Th. Stcherbatsky によつてロシア語で發表された次の五つの論文が Harish C. Gupta によつて英訳された。それらの書は本論として、Debiprasad Chattopadhyaya が長文の序を始めに付加している。また本論に続いて Th. Stcherbatsky の著作・論文目録とシ連学士院の文書局に保管されている彼に関する資料の目録が付加されている。

一、一神教に関する佛教哲学者

Buddiskii filosof o edinobozhii [A Buddhist Philosopher on Monotheism]. "Zapiski Vost. Otd. Imp. Rus. Arkheol. Obshchestva", St. Petersburg, 1904, V. 16, No. 1, pp. 058-074.

チベット大蔵經・東北目録 No. 4461, 北京版影印 No. 5905 のチベット訳テキスト、梵文テキスト、英訳、と解釈が含まれている。

二、インド唯物論史

K. istorii materializma v Indii [On History of Materialism in India]. "Vostochnye zapiski (東洋學報)

Leningr. instituta zhiv'kh vostochnykh yazykov", Leningrad 1927, v. 1, pp. 1-10.

三、インダの詩学理論

Teoriya poezii v Indii [Theory of poetry in India]. "Zhurn. Minist. Narod. Prosveshcheniya". St. Petersburg, 1902, Ch. 341, No. 6, Sec. 2, pp. 299-329.

四、古代インダの科学的業績

Nauchnye dostizheniya drevnei Indii [Scientific Achievements of Ancient India]. In Ochet O deyatelnosti Rossijskoi Akademii nauk za 1923, god [Report on the Work of the Russian Academy of Sciences for the Year 1923], compiled by S. F. Ol'denburg and read at the meeting of the Academy held on 2nd February, 1924, Leningrad, 1924 pp. 1-25.

五、法称の他相統成就と法上のその註の翻訳

Dharmakirti. Obosnovanie chuzoi odushevlenosti. S tolkovaniem Vinitadeva [Establishment of the Existence of Other minds. With Vinitadera's Commentary]. Translated from Tibetan. Petrograd, 1922, XV, 79 p. (Pamyatniki indijskoi filosofii, No. 1).

A double translation into Russian—one free and the other literal—of Dharmakirti's Santānānta-siddhi and Vinitadeva's Santānānta-siddhi-tīka.

(巻末目録による)

それらの中、第一と第三のものは極めて初期の作品であり、第三の「インドの詩学理論」はビューラ教授 (G. Bühler) の影響の下で完成されたものとして夙にその存在は知られていたが、ロシア語に親しまない我々には一読すること出来なかったものである。それが英訳されて一読し得ることは喜ばしい事であった。その他の論稿も同じ事

情に置かれていた。

一は龍樹 (Nāgārjuna) に帰せられた「世界の作者である神 (Īśvara) という見解の否定と全世界の唯一の作者であるヴィシシュ (Viśnu) という見解の否定」^②という標題をもった小論である。梵蔵の資料を具備した論の翻訳であるが、カリヤーノフ (V. I. Kalyanov) のシチェルバトスコイ伝^③の中には述べられていない。序の最後に「この論は上述の弁証法的精妙さは含んでいなくて、唯々簡単に一般的な一神の觀念を否定するだけである」(本文一〇頁) といって本論の翻訳そのものよりも序の方に量・質共に中心が置かれている。序によると、一神教を佛教徒が論破したというその事実は一神教の概念がインドに於いて知られていたことを証明しているということから、西洋の宗教思想と比較・論議しながら、最後に「これら全てのことからして、インドは一神教を熟知していただけでなく、むしろ一神教がインドの觀念論の最高の形体であった。……しかしインドは種々の時代に一神教より別の形体の宗教をもち、それらの中には無神論の宗教さえあった」(本文九頁) といい、無神論の系譜を概観する。

第二のインド唯物史論は所謂業の法則、即ち善惡の作きに対する報いの法則を否定するという事実によって、全ての他の傾向から殊別し、この問題に対する主なサンスクリット原典とヨーロッパの研究の全般的な概観を与えている。(竜山章真・「順世派研究資料」^④や同・Tokāvata に関する研究^⑤等と比較すると一層理解に役立つものである。)

第三のインドの詩論は前述の如く早くから知られ、彼の詩学研究が彼の印度哲学研究の基礎をなすともいわれているものである。(後述)

第四はインドにおける科学論であり、前出のカリヤーノフの伝記の著作事項には見られず、本書の序分には第二、第三、第四と一緒に佛教以外のインドの文化的遺産の下で述べられている。

第五は五篇の中、最も佛教論理学に近い論であり、唯識の論ともい得る。实在論者と觀念論者との対論であり、前出の表題下で示す如く、前分がチベット訳本文の意識であり、後分はその直訳をなしている。本論には北川秀則・

「佛教に於ける他我存在の一証明」と同氏の英文「A Refutation of Solipism」があり、参照しなければならない。

前述の如く、これらは全てロシア語からの英訳であり、ロシア語の原文を見る機会を得ない今、一読の域を超えることが出来ない。しかし Debiprasad Chattopadhyaya による序分は一応原文であり、可成長文でもあるので、再読し、彼の見たシチエルバトスコイの学説の立場を、英訳された本文に照らして考察したい。この序分は前引のカリヤーノフのシチエルバトスコイ伝も屢々引用しているが、その外にシチエルバトスコイの「佛教論理学」(Buddhist Logic)を始めとして諸書を引用する。その中、特に重要と考えられるものは N. P. Anikeev, Modern Ideological Struggle for the Ancient Philosophical Heritage of India, Calcutta 1969. である。

なおカリヤーノフのシチエルバトスコイ伝に述べられている点と重複する点は出来るだけ省略することにした。特に ミナエフ (J. P. Minaev) 、ビューラ (G. Bühler) 、ヤコビ (H. Jacobi) 等彼の師匠との関連は特に重要であるが、カリヤーノフの伝記に詳しいので省略し、教授の諸々の著作についても省略する。

註① Indian Studies: Past & Present の編纂者であり、Nyāya-Philosophy. (Pt. I, II) を M. Gangopadhyaya と共に著している。なお一読の機会はないが、N. P. Anikeev, Modern Ideological Struggle for the Ancient Philosophical Heritage of India. p. 55 による「Lokāyata: A Study in Ancient Materialism」の著者であると示される。

② ドイツのチベットの学者 H. Wenzel からオルデンブルグ (S. F. Oldenburg) を経て、この写本が入手されたが、H. Wenzel はチベット藏経中のサンスクリット音写とチベット訳によったのである。

③ 金岡秀友訳「大乘佛教概論」の最後に附されている村山七郎訳「シチエルバトスコイ伝」による。因に本書の序分にもこの標題はなく、唯、ヤコビ (H. Jacobi) の「印度古代神観史」に簡単に述べられ、「この論が事実、龍樹に基づくかどうかは疑わしいが、かなり古いものであることには間違いない。」「山田・伊藤訳六六頁」とのべている。

- ④ 宗教研究 新第十一巻三号
⑤ 大谷学報 第十一巻第一号
⑥ 文化 第十八巻第三号

二 (A)

シチエルバトスコイ教授はインド人の過去を発見し、インド人自身の哲学的遺産の正しい見通しを復原するためにインド人を助けたのである。周知の如く教授は陳那 (Dignāga) 法称 (Dharmakīrti) 等のテキストにカントの哲学を読み、或はそれについての可能性を読み、その佛教論理の深い研究によってインド思想の特殊性を理解し、それによってインド思想が現代の学問世界に正しく位置され得るという熱意があったのである。その事がまた「このような記述は、カントが哲学的偉大さの量にはならないとする人々にとっては比喩的な価値さえないし、一方文字通りの意味にとるならば、具体的に歴史的に関連してなす法称の哲学的地位の客観的理解を妨げることになりやすい」(序一頁) といって、その方法のもつ欠点を指示しながら、なお佛教論理学の伝統の新発見と呼んで、その学問研究を高く評価している。

その事情を知るために少しく冗漫のきらいはあるが、序の本文の相当個所を掲げる。

「佛教論理学に関する吾々の知識は、動きのとれない程、チエルバトスコイの著作と関係しており、吾々は彼を唯一のその発見者と呼ぶことができた。しかしただ次のような事実を除けばである。その事実とは、その主題(佛教論理学)に関して彼が著作した頃、インド論理の歴史家であるヴィドヤブフウシャナ (S. C. Vidyabhūṣaṇa) が彼とは全く別に、しかも彼が自身従事したものと同じ線に従って、その主題の別の開拓者として著作をなしたということである[History of the Medieval School of Indian Logic, etc.]。それだから佛教論理学の発見を語るとき、シチエルバトスコイの名に、ヴィドヤブフウシャナの名を付加しなければならない。しかしこれ等二人の学者の著作の成果と、同じく手びき(approach)との間に基本的な相違がある。ヴィドヤブフウシャナの方法は、概してありのま

まの歴史家のそれであるのに比して、シチュエルバトスコイは現代術語における所謂合理的な佛教論理を希望し、その力強い哲学的擁護を企てることを希望した。古代インド人は正確な思考と明瞭な表現をなすことが不可能であり、これらの特性を専ら古代ギリシャと現代の学問に帰したのだと責めるヨーロッパの学者を彼はしばしば批判した。また実証的な哲学はヨーロッパにだけ見られる筈であるという偏見が広く流布されていると論じ、またアリストテレスの論理学が究極的なものであり、この領域に於いては彼に先立つ人もなく、後に続く人も必要なかったという偏見があると批判し、……ここに論理の問題が形式的にも認識論的にも、陳那と法称とによって取りくまれた独特の考察は何らかの重要性を作り出すことが可能になるだろう……^①

第二には現在見る如く、シチュエルバトスコイは一時代の輝かしい学者を養成し、彼の研究方法を継続せしめたが、インドでは実際にヴィドヤブフウシャナの仕事を継続する目立った学者はなかった。」(序二―四頁)

といって、佛教論理の新発見、ということに自由な解釈がなされ、合理的な考察と哲学的擁護を企てる考察とにシチュエルバトスコイ教授の学説の特殊性の一つを明らかに示めそうとしている。

インド哲学のテキストの中で関説される佛教論理に関する僅かの陳述を考察する場合も、それが前分所破において対論者として設定された場合も、ウッディヨータカラ (Uddyotakara) の正理評釈 (Nyaya-varttika) のように表向きは正理経 (Nyaya-sutra)、ヴァーツァヤナ (Vatsyayana) の正理釈疏 (Nyaya-bhasya) と次第する釈疏の評釈であるに拘わらず、その内容は主として陳那との論諍である。そうした形で提起された佛教論理の陳述も、その考察に当ってシチュエルバトスコイは「その陳述がその陳述を否定し嘲笑する目的で種々に引用され、実際の関係を除き、逆の設定で表現され、不当な意味を付す傾向がないではないと考え、印度哲学の著作も、対論する佛教論理の知識がなくは十分に理解され得ないという立場に立っている。そこに佛教論理の新発見の自由な解釈があるという。しかし厳密な意味での新発見・即ち陳那や法称の原典の発見はシチュエルバトスコイにも無くて、それはラーフラ (Rahula) が

量評釈 (pramāṇavārtika) を発見するによって、佛教論理の伝統が再現され、それが陳那の集量論 (pramāṇa-samuccaya) と法称の正理一滴 (Nyāya-bindu) のシチェルバトスコイの研究のみならず、彼の正理一滴やその注釈や復注の厳密な研究に基礎を置いているという。

また、チベット資料を基礎として佛教研究に従事した学者は彼以前にも Alexander Csoma de Körös, H. A. Jäschke, Sarat Candra Das, I. G. Schmidt, W. V. Vasiliev, A. Schiefner 等があり、すばらしい貢献したが、シチェルバトスコイは彼等とちがった特色をもつといって、「他の学者は主としてチベット資料を後期佛教を理解するために、その宗教上の、哲学上の、そして神秘的な面に使用したけれども、シチェルバトスコイは後期佛教の本質的に合理的にして論理的な貢献をチベット資料によって厳しく作成した最初の人であった」(序一〇頁) といい、またインド哲学に注意するところの、より広くインドの文化的遺産に注意するところの一般的傾向を有するヨーロッパの思想家達からも相違し、すなわち「彼等は全て唯々宗教的精神上のことのみを強調し、さらに Upaniṣad と Śaṅkara Vedānta の途方もなく観念的傾向を強調するために、インド人の智慧の若干曲解した描写を基礎にしつつあった。」(前同) それに相違し、シチェルバトスコイはインドの哲学的遺産にかかる傾向のあることは認めながら、その非科学的、非客観的傾向に対し反論し、それによって神秘的な、しかも狂信的でさえある佛教から幸いにも本当の佛教を殊別する^②ことが出来たと彼は主張したという。

註① Buddhist Logic, I. Preface xii.

② S. F. Oldenburg as an Indologist (in Russian). Leningrad 1934 p. 80.

二 (B)

先にヴィドヤブフウシャナとシチェルバトスコイの相違する第二の点として、同じ方法で仕事を続ける重要な学匠

を育成したか如何かということが述べられた。前者はそうした弟子をインドに残さなかったのに相違して後者は多くの勝れたロシアのインド学者を育てた。シチュエルバトスコイと殆んど同時代に活躍したロオゼンベルグ教授(O. Rosenberg)を第一に掲げ、彼の「佛教哲学の諸問題」(Problems of Buddhist Philosophy)はシチュエルバトスコイの大変推賞したものであるという。以下主として蒙古の言語・歴史・文化の研究で活躍した学士院会員 B. Ya. Vladimirtsov、エプト語の P. V. Ernsted、インドイラン言語の A. A. Frieman と現在レニングラード大学の梵語の教授であり、古代インドの歴史と文化の種々の面で第一級の研究をなしている V. I. Kal'yanov を簡単に指示し、次に三十代の始めに若くして世を去った E. Obermiller [1901-1935] と A. Vostrikov [1904-1937] について詳説されている。

「シチュエルバトスコイに鼓舞され、保護されたオバミラーは早い時期に佛教研究のために梵語・チベット語・蒙古語に特別に熟達することを得た。彼の健康も極度に貧しく個人的資力も十分でないのに Transbaikai と Buryatia へ旅行し、僧院に保存されている佛教のテキストを研究した。これらのテキストは単にチベット語で保持されたインドのテキストであるだけでなく、チベットの学者によって原典として書かれたテキストを含んでおり、インドにおいて佛教が実際に減んだ後も、そのチベットの学者達が、大変重要な点で佛教の伝統を維持しつづけたのである。」といてつづいてオバミラーがシチュエルバトスコイの指示の下で作成した業績を述べている。

次にヴォストリコウ Vostrikov はチベット学者として、またサンクリットに熟達していることとインドの哲学的論議の専門的事項に熟達していることは驚く可きであり、シチュエルバトスコイ自身中辺分別論の種々の困難な句を始めとして多くの点で彼に助けられたといい、特にこの二人を重視する。

オバミラーの著作は、

- (1) シチュエルバトスコイが出版した法称の Nyaya-bindu と法上 (Dharmottara) の Nyayabindu-tika に対する

Sanskrit-Tibetan 及び Tibetan-Sanskrit の 'Index-Verborum'

- (2) Abhisamayā-lamkāra-prajñā-pāramitā-upadeśa-śāstra [現觀莊嚴論] の編集・翻訳・解釈するためシチエルバトスコイの協力者となり、一九二九年刊

- (3) 阿毘達磨俱舍論の釈疏である称友 (Yasomitra) の Sphūtartha の第二 Kosaśhāna の出版をシチエルバトスコイより委託され、刊行

- (4) 彼の死んだ年に、ツォンカバ (Tson-kha-pa) の研究を一九三五年に発表 (Tson-kha-pa le Pandit, "Mélanges chinois et bouddhiques publiés par l'Institut Belge des Hautes Études Chinoises", vol. iii, Bruxelles, 1935)

- (5) 次の年遺作として、

How to study the Tibetan Medical Literature.

- (6) ブトンの佛教史 (Chos-byun) の英訳

- ['History of Buddhism (chos-byun)' by Bu-ston, pt. i, ii, Heidelberg, 1931-1932] この著作は直接シチエルバトスコイのアドバイスの下で企てられ、シチエルバトスコイは preface で「一九二七年と一九二八年私は弟子オバミラーのために、研究題目として、この作品を解釈し、その間、彼はそれを英訳し、それは私が校訂し、出版した」と。オバミラーについては、これらの外に佛教教理に関する立派な著作を多数吾々は已に知っているが、ここには省略する(山田竜城・「梵語佛典の諸文献」参照)。

ヴォストリコオウ (Vostrikov) については、この場所で述べている論稿を彼の主著「チベット歴史文献」(Tibetan Historical Literature) の中び、A. N. Vostrikova が紹介するものと、著者自身が各処で引用するものとで確認すると次の如く数えられる。

- (1) Pramāṇa-Varttika のチベット訳本をその Devendrabuddhi の註釈と共に編集し、それら何れをも訳した。

(O) *filosofii Dharmakīrti* [On the philosophy of Dharmakīrti] 1931)

(2) ウディヨータカラの正理評釈と法称の諍論正理。 (The Nyāya-Vārtika of Uddyotakara and the Vādayāya of Dharmakīrti. 1935)

(3) 世親の論理に関する著作(二)であり、——シチェルバトスコイは陳那の思想の歴史的背景を理解するに最も役立つ根拠となった。——

(Logical Works of Vasubandhu. 1934)

(Logic of Vasubandhu 1935)

(4) チベット語文法 (The Grammar of Tibetan Language) これは彼が早逝したのだから、未刊で残されているものを、シチェルバトスコイが一九四一年に完成したのである。

(5) チベット研究の領域の最も偉大な貢献は、「チベット歴史文献」(Tibetan Historical Literature)であり、彼の死後二十五年を経て、一九六二年に佛教文庫叢書 (Bibliotheca Buddhica) の中で出版された。これが一九七〇年、H. C. Gupta によって英訳されて、Soviet Indolog Series, No. 4 として出版された。

(6) 前の「チベット歴史文献」作成への準備として次の二つの論文がある。

(A) *Bibliografiya tibetskoi literatury* [Bibliography of Tibetan Literature] *Bibliografiya Vostočka*, Nos 2-4.

(B) Some Corrections and Critical Remarks on Dr. J. van Manen's Contribution to the Bibliography of Tibet.—*Bulletin of the School of Oriental Studies*, London, vol. viii, 1935, pp. 51-76.

(7) 時輪 (Kalacakra) のサンスクリット原典を二つの写本(一つはロンドンで保存されたもの、今一つはミナエフ教授によってインドから将来されたもの)から編輯し、そのチベット訳と共に出版した。

(8) オルデンブルグ・シチェルバトスコイ・オバミラー・セミイコーウと共同して、彼は「実利論」(Arthaśāstra)

の翻訳をした。(一九三三年)

- (9) その他 S. F. Oldenburg i izuchenie Tibetu [S. F. Oldenburg and the Study of Tibet] を発表し、ロシアにおけるチベット研究の概観と Leningrad Branch of the Institute of People Asia (Academy of Sciences, USSR) に集輯せられたチベット写本と木版の歴史の概観をあたえている。

- (10) また有名な Vacaspati Misra, Nyāya-Vārtika-tātparyavārtikā を訳したと進行中の出版目録が報じているが、未だ出版されていない。

三

しかし本書には第二、第三、第四において論理とも佛教とも相違し、インドの一般文化的遺産と考えられるものの研究が含まれているのである。彼が如何してこのようなインドの文化的遺産に興味をもったかについて、introductionの著者は同時代のヨーロッパ人の或る人々は知らない神秘的な東洋に対するロマンチックな魅力だけでインド文化を研究し、叙述しようとするのに反対して「シチェルバトスコイは神秘的な東洋のどんなロマンチックな魅力に対して最も徹底的な嫌悪を示し、彼は科学と合理主義に対するインドの貢献を認識することの重要性を主張したヨーロッパ人学者の中の最初の人であった。オルデンブルグ (Oldenburg) と共に、インドの文化的遺産の誤った一般的な考えのために彼が暗示した救済の一つは、インド思想について特にその論理的・科学的な面で、一層当を得た客観的な年代付けをし、利用し易くするために研究著作をなすことであった。」(同、二十二頁) とのべている。

第三のインドの詩学理論の中で、シチェルバトスコイは次の如くいう。西紀始めから三世紀の間は、力強くマウルヤ王朝がヒンドウスタンの北方を支配し、その力は東方にまで拡がった。恐らくその宮廷において Gandhi が培われ、その反動として Vaidarbh^① の型が生じ、詩論と修辭学というこの型の理論的組織もまた同時に発展したのである。

そして先ず始めに詩論 (poetics) と修辭学 (rhetorics) とは二つの別々の学問であり、前者は詩の作品の形とそれらの中にある種々の感情の表現との研究にわたっている。しかるに後者は型態の質、詩藻 (rhetoric figures)、型態の誤の研究を取り扱っている。そしてこのような区分が第十世紀まで続き、その第十世紀には、新しい文学上の型態の創設者であるアーナンダヴァルダナ (Ānandavardhana) は、感情や情緒の研究が戯曲の領域から物語体の詩の領域に移り、二つの学問を一つに統一した。その時から詩の理論すなわち *alankāra śāstra* 「莊嚴論」は詩の心情、情緒、型態、詩藻、詩の作品の形と音 (dhvani、詩の発音の二重に暗示する意味) を含むことになるという、それらの一つ一つを心情と情緒、音 (dhvani)、型態との項目別に詳説されるのである。その詳説はウインターニッツ (M. Winternitz) のインド文学史等と比較して見れば容易に理解されよう。しかし今は前述の事を引き起すために述べられているインドの詩論が何時頃から生じたかその起源を述べることは困難である、という点に特に注目される。その理由としてインド人は知識の全領域と同じく、抽象的な真理に興味をもち、歴史的・地理的な面に全くふれることがないと述べ、「詩論に関する文献は多数あるに拘わらず、歴史的発展を示す詩の種々の領域の研究資料は殆んど見られない。しかし同じ問題に関して多くの著者が示した意見を比較したり、彼等の論評を綿密に追求することによって、或る程度吾々はこの発展を画くことが出来る。」^② といい、また、「詩論に関する最初の著作家はバラタ (Bharata) であると一般にいわれ、それ以後の著者は常に彼を牟尼即ち聖なる者と述べているけれども彼の作品は戯曲詩にふれるだけである。次に詩論の分析と詩の本質は彼以後大変発達したので、以後の著作家達は極めて大雑把に彼について述べるだけであり、また極めて稀にしか関説しない。」(本文二十七頁) といって、必ずしもバラタ起源を積極的に肯定はしていない。強いていえば大目に見てその説を許容するでもなく、無視することもない記述である。そして実際に前述の如く西紀の始め三世紀の間に起源を求めている。「最近吾々は石に刻まれた僅かの詩の作品を知るに到り、これら碑文の年代付は西紀の初期の数世紀に戻り、全く特殊の文学の型 *Vaidarbhi* で作られている。」^③ (本文二十七・二十八頁) という記

述から見て主因を碑文に求め、その他宮廷詩人の地位や社会的なあり方の考察で補っている。

註① カーヴィア調のスタイルに三種あり、Vaidarbi, Gaudi, Patkali であり、誇張的なスタイルである。(ヴァインテルニッ

ツ・インド文学史、中野義照和訳第三巻インドの純文学五六一頁)

② 辻直四郎編「印度」六七八頁、及び上記インドの純文学参照

③ G. Bühler, Die Inschriften und das Alter der indischen Kunstpoesie. Wien 1890 224ff.

四

最後にインド哲学は神秘主義によって徹底的に誤ったとする余りにも単純な考えを戒めて、本論第五の意識の最初の部分と同教授の涅槃論(The Conception of Buddhist Nirvana)の第三章神秘的直観(和訳四十五頁十一行—十五行)の解釈とを引用して説明に代え、次に結論としていう。

「彼はインド哲学における神秘主義と宗教との影響を大目に見る事もないし、無視することもない。しかもインド哲学の中に神秘主義や宗教のみを見た人々とは絶対的に無関係であった。逆にインド哲学の伝統が彼にとって真実に重要であったものは、その堅実な論理的核心であり、また哲学固有の言葉でする力強い哲学上の諸問題の論議である。これを無視することは、インド哲学の病的な興味だけであった」(序二三頁)と。